

# 東区の山車祭り

2018年3月5日FB記 高橋和生

## はじめに

一年前に不遜にも、名古屋都市史を書いてやると「名古屋昔話」を2週間でやっつけたのですが、一番身



近にある「東区の山車祭り」を飛ばしたのでした。神皇車(じんこうしゃ)、湯取車(ゆとりぐるま)、鹿子神車(かしかじんじゃ)、河水車(かすいしゃ)、王羲之車(おうぎししゃ)と東区には5台あるのですが、いずれも祭りの前日には、津島神社(旧名 津島牛頭天王社)に行き、お札をもらいます。都市における厄病払いの牛頭天王信仰である事と、御輿でなく山車であることに興味をもっていました。

津島の凸から「日本の東は津島で、西が八坂神社と分けたのよ。」と言われ、また、津島神社を含め全国の祇園社の社紋の木瓜紋が織田信長の紋となっている事もあり、城マニアとしては、ここはジックリと調べる必要があるとして、飛ばしてしまったのでした。



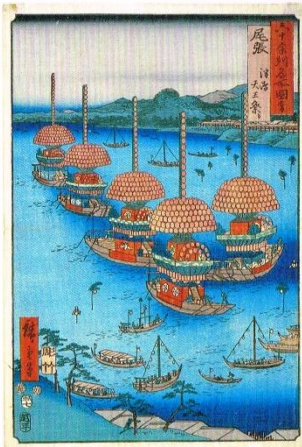
## 第一章 信長と牛頭天王 第一章 第一節 津島神社

「木瓜紋 もっこうもん」は、信長の紋で有名ですが、この紋は津島牛頭天王社、京都の八坂神社の紋でもあります。織田が津島牛頭天王社から得ていたのかどうかの記録はありません。

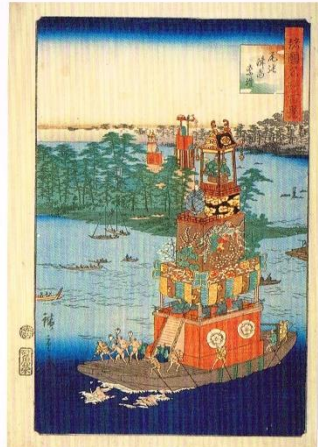
織田一族は、室町幕府の重臣・斯波家が守護大名であった越前から応永7年(1400年)に尾張に主家と共に移ってきており、尾張守護代を世襲したのですが、応仁の乱(1467年)では織田一族も割れ、文明11年(1479年)尾張上四郡を織田伊勢守家、尾張下四郡を織田大和守家が清州を新たな守護所として治めることで和睦が成立したのです。



織田信長の曾祖父・良信は、織田大和家の分家から出て清洲の3奉行と言われ、織田弾正忠家をおこし、信長の祖父・信定(?~1538年)が、中島郡・海西郡に勢力を広げ、津島の港を押さえ津島に居館を構えています。永世年間(1504~21年)に津島の北東の勝幡に城を構え、信長の父・信秀(1511~1552年)が城を継ぎ、この城で信長は天文3年5月(1534年~82年)に生まれました。元禄15年の津島祭りの記録「大祭り勘例帳」には、大永2年(1522年)から元和4年(1618年)までの津島5村が出す車楽と置物が記されているので、信長も現在とほぼ同じ祭りを見ていた事でしょう。



35 六十余州名所図会 尾張津島天王祭り



36 諸国名所一覽 尾張津島祭礼

当時の木曾川は佐屋川、日光川、大江川、五条川と上流で幾つも分流しており、津島は満潮に乗って川を上ってくる桑名（畿内・西国）からの港として、応仁の乱で焼けた京に祇園祭りが復活した明応9年(1500年)以降には、尾張（国府宮、一宮、萱津、下津、岩倉）への港として栄えていたことでしょう。熱田の港の繁栄は名古屋城・堀川が出来てからです。

信秀が中島郡・海西郡の国人から戦国武将として尾張をまとめ、今川・斎藤に戦いを挑むのには、当然、津島の財力があつての事であり、津島牛頭天王

社から紋をもらいうけ、織田弾正忠家の旗印に使ったとするのは間違いがないでしょう。津島神社の伝承では、信長の氏神かも？とありますが、現代の氏神・氏子の関係とは違い、領主とその在地の神社でかつ寺であり、国人が寄生する領地の財力の象徴なのでした。

信長自身が子供の頃に津島の天王祭りを見たという記録はありますが、もっと確実な信長と津島牛頭天王社とのつながりは、あの安土城にあります。



図6-3 安土山惣見寺（『木曾路名所図会』所収）

## 第一章 第二節 安土城

天正3年(1575年)信長は41歳。父・信秀の亡くなった同じ年に、権大納言、右近衛大将を朝廷よりいただき天下人となると、嫡子・信忠に大名としての家督を譲り、翌天正4年に安土に移ってしまうのです。

天守は天正7年(1579年)に完成するのですが、その尾根伝いの城下につながる大手道沿いに、甲賀から建築を移築し、3重の塔をもつ大伽藍、惣見寺を突貫で作ります。六角氏の佐々木定頼の菩提寺、江

雲寺を由来としたらしいのですが、創建当初は津島牛頭天王社の僧＝堯照法師が信長に呼ばれて着いています。社でありながら僧というのが、当時を反映していて、いかにもです。

今は安土城の山全体を所有している臨済宗妙心寺派の寺ですが、どうも「信長教」の為に作られた寺のようなのです。

この時、信長は城下に、キリスト教も含め寺を集めており、その一つ浄土宗の浄厳院では、有名な「安土宗論」を行わせています。浄土宗が勝つのですが、町衆の信仰に支えられ法華宗を膝下におく演出が見られ、下京から黄金1万枚を上納させ、出さないと上京を焼いています。しかし、信長は法華宗の寺を京の定宿として、法華宗の本能寺で亡くなっています。

宣教師のルイス・フロイスは、「信長は安土の最も高いところに「ぼんさん」という石を置き、それを信長自身として5月の誕生日に御参りすれば功德が受けられるとゼウスのごとく振る舞ったので、地獄に落ちた。」と書いています。

信長といえば、比叡山焼き討ち（1571年）長島一向一揆（1571～74年）の虐殺が有名ですが、神仏を知らない、無視をするのではなく、権力を握るに宗団が敵とみなせば容赦なく殺し、石山合戦（1570～80年）のように、講和によって決着することもあるのです。

「信長教」の功德とは、富・子孫繁栄・長寿・平和・安楽・病気治癒・希望・健康・平安と続きます。まさに現世を生き抜こうとする庶民の願望とピッタリあっています。幼いころから、牛頭天王に親しんでいたからでないでしょうか。

安土城天主の造形は、信長が熱望した妙心寺儒僧南化玄興の七言詩を見るように、都の文化、知識人たちの世界を反映させたものです。ローマ法王に狩野永徳に描かせた安土城下の屏風絵を送るなどは、田舎の尾張から遅れて現れた戦国大名が、天下を取って、鼻高々に世界に向けて自慢しているのですから、ほほえましくもあります。



安土城天主が真似をした多層の建物は、金閣寺に他なりません。これは俗称であり、日本国王となった足利義満の住まいと政治の中心（1397年）として北山第が造営されたのですが、金閣寺はその中の、仏舍利をまつる舍利殿でした。第一層は寝殿作りの住宅、第二層は「潮音洞」と言い、観音像を置き天井には

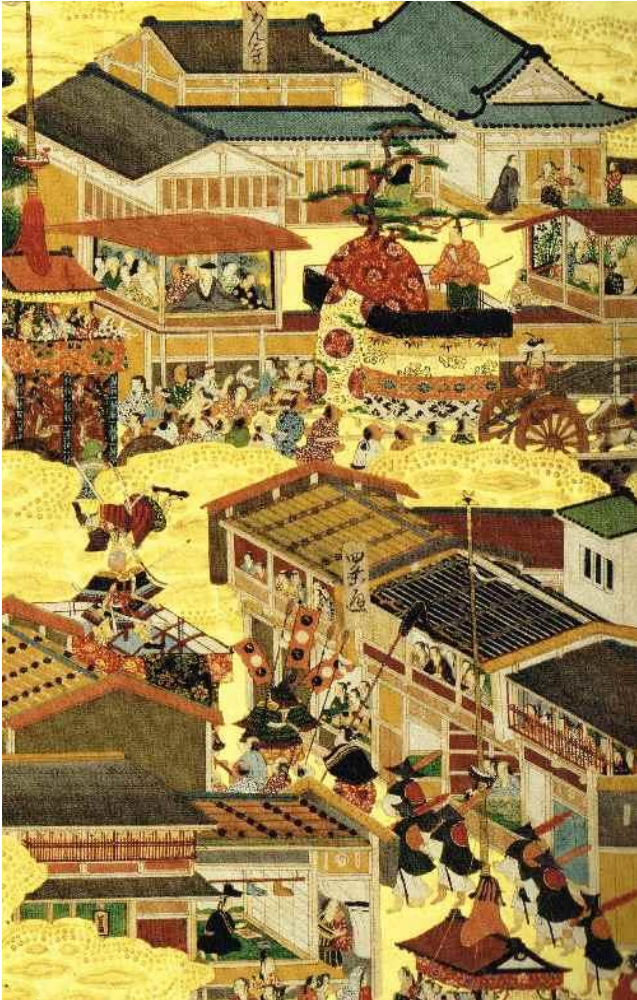


極彩色の天人飛天のさまが描かれています。安土城天主の5階の朱塗り八角プランの仏教テーマと一致します。第三層は、「究境頂」と言い、金色ギラギラの禅宗仏殿風なのですが、安土城天主の6階の儒教・道教テーマと一致します。儒教・仏教・道教の三教を禅宗の僧たち、当代の知識人はないまぜにして「唐様」と呼び貴んだのでした。

安土城天主の地階には、宝塔・舍利容器があり、法華経に説かれる地下から湧き上がる造形を吹き抜けて表現し、その周りの1階～3階に、後の書院造りと言われる武士の住まいを立体的に積み上げています。2階の吹き抜けには能舞台まであります。

夢窓礎石の禅林境地は、高低差を利用した堂塔、楼閣、亭橋の構成に

より、今も、日本庭園において血脈が伝えられています。安土城天守の内部にも、それらを模すことができます。地下の宝塔は天竜寺十境の亀頂塔や北山大塔に、三階の吹き抜け中央に架せられた橋を東福寺の通天橋や北山殿の二階楼に、5階は將軍館の持仏堂・観音堂に、6階は將軍の座禅修行の場＝禅堂です。



### 第一章 第三節 祇園祭

信長公記では、馬揃えが祭礼として華やかに書かれています。信長にしてみれば、天皇から町民まですべての階層への、武力の誇示でもあったのでしょう。しかし、町人が主体となった祇園祭への信長の関心を示す記述を太田牛一はしていません。信長公記では信長が祇園祭を天正6年45歳、安土城が工事中の時ですが、見物したとアッサリあるだけです。町人との交流は、能の観劇に招待されたのと堺の商人との茶会しか書かれていません。

信長は天正2年(1574年)に上杉謙信に洛中洛外図を送っています。これは、將軍・足利義輝の注文で天才・狩野永徳が18~22歳の頃(1561~1565年完成)描いたもので、京の町屋の繁栄を、山車が巡航する祇園祭で表現しています。

信長は、伊勢神宮の遷宮の為に銭3000貫を気前よく出しているのに、この京一の祭り、祇園祭りへの信長の無関心さは、太田牛一の忖度があったのかもしれない。なにより、祇園神社の社紋は「木瓜紋」であり、織田信長の紋と同じなのです。

なお、八坂神社は明治の廃仏毀釈により祇園神社を改名したものです。

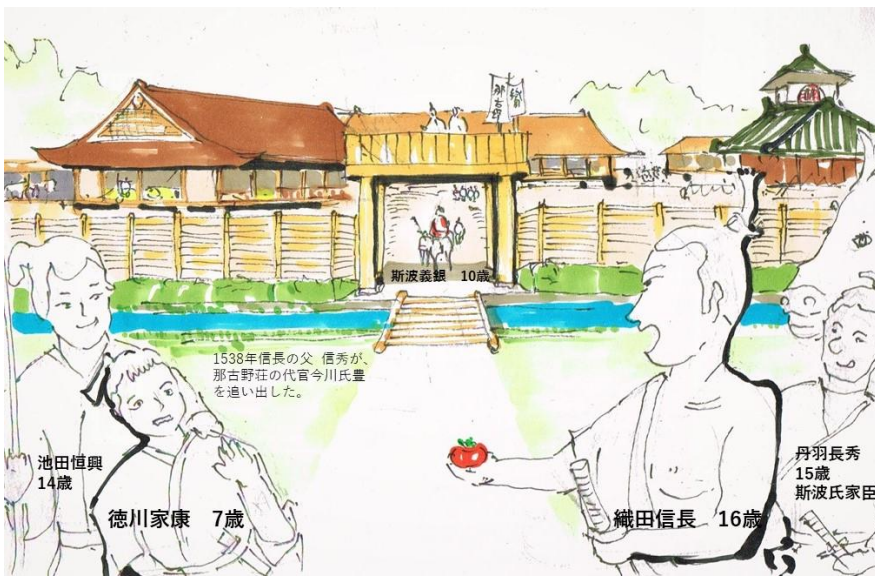
記録はないですが、文化の高低からして、人が集住する都市ならではの、厄病払いの牛頭天王信仰が京から全国の地方都市に広まり、中世の港町、津島にも伝播したと捉えるのが当然です。

その津島牛頭天王社の社紋を祖父がもらい受けた信長にしてみれば、ここ京において、織田の紋の本家筋にあたる祇園神社は、感神院と号して比叡山延暦寺の京における出先でもあった事もあり、そこに頭を垂れる事は、天下人となって比叡山の権威を否定し、信長教を打ち立てようとした信長にはありえなかったのでしょうか。

すでに 150 年も続く町衆の祇園祭に、信長は華やかな馬揃えで対抗し、ドライに矢銭要求の形でしか町衆との関係はもたなかったのを、私は、津島牛頭天王社との結びつきを保持しようとしたのではないかと考えています。理由は先に書いた、天正 7 年の摠見寺への津島牛頭天王社の僧＝堯照法師の着任です。

ここに、津島の凸のいう「日本の東は津島で、西が八坂神社と牛頭天王を分けたのよ。」は単なる伝承でなく、木瓜紋と成り上がり者の信長の志向から、極めて高い蓋然性を持ちえます。信長は、そうあってほしかったのです。

信長は、26 歳の時（1559 年）着飾った 80 名を従え上洛。尾張の下 4 郡を支配しており、近く尾張全国を治めると、戦国大名として足利義輝に謁見しています。以来、49 歳に本能寺で倒れるまで疾風のごとく京に現れますが、京の二条に自らの館を作るも、東宮に譲っており京に住むということはありませんでした。京がウザカッタのだと思います。



天文18年(1549年)秋 那古野城 信長は12歳～22歳（1555年）那古野城主であった。家康は人質として城下の万松寺に居た。

那古野の牛頭天王は、家康が名古屋城を作る時に既に「亀尾天王社」としてあったのですが、二の丸から出され、東照宮とならべて今の金シャチ横丁のところに明治 9 年まであり、明倫堂の跡に移座し、明治 3 6 年に那古野神社と名を変えました。

#### 第一章 第四節 那古野城

信長は 12 歳（1545 年）から 22 歳（1555 年）の 10 年間、那古野（なごや）城の城主となります。清州の 8 年、小牧の 4 年、岐阜の 9 年、安土の 6 年と比べ一番長く、人格形成にも那古野の町は影響を及ぼしたのでしょうが、町の姿はわかりません。現在の二の丸に館城があったのであろうと推定されています。



#### 第一章 第五節 熱田神宮

信長 27 歳（1560 年）桶狭間の戦いは、織田一族の内ゲバを納め、自らが兵 2000 の先頭に立つことによって兵 2 万 5 千の今川勢に勝ち、まさに戦国武将としてデビューしたのです。よく言われているのは、熱田神宮で戦勝祈願をし、勝ったのでお礼をした。ですが、私には、この戦いで信長が熱田の宮大工・岡部又右エ門を得たことが大きいです。

桶狭間の戦勝記念の海上門（戦災焼失）と信長塀と俗称する大練塀が最初にあり、後に信長は元龜 2 年（1571 年）～天正 3 年（1575 年）に渡って旧来の面目を一新するかの如き熱田社の大造営を行い、長篠出陣の前には熱田社撰社八剣宮の造替を命じていますが、全て岡部又右エ門が行っています。何よりも天正 7 年（1579 年）に安土城天守の棟梁を務め、「日本総天守の棟梁」とされたことが大工の岡部の最大の功績です。戦いにあつては、当時の大工は工兵隊を務め、天正 10 年本能寺の変において、岡部親子も討ち死にしています。

熱田神宮の最大の祭りをご存じでしょうか。例大祭を略して「例祭」と呼び、一般には「6 月 5 日 熱田まつり」と呼ばれ、夏到来の花火もあがる夏祭りですが、これは実は牛頭天王の祭りなのです。津島神社のように朱色の撰社・南新宮社は、素盞鳴尊（すさのおのみこと）をお祀りしているので間違いがありません。

明治になって、日本唯一の宗教改革が行われました。皇国日本を記紀の神話から読みほどこき、平安時代の延喜式をもとに、伊勢神宮を頂点とする社格が決められたのでした。「廃仏毀釈」と教科書では簡単に習いますが、寺に神社があるのが当たり前であった日本の宗教観をごろりと変えるものでした。

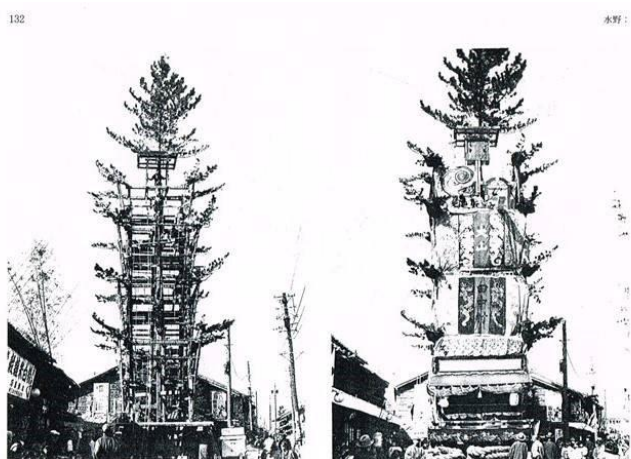


図7 熱田大山の空木建て（『郷土の山車写真集』より転載）

図8 熱田大山の盛装（『郷土の山車写真集』より転載）

この大山が岡部に安土の吹き抜けを作らせた。というのは？



図9 熱田大山の車輪（『熱田大山祭』より転載）

牛頭天王とは、外来の得体のしれない神ですので、当然記紀になく、牛頭天王は素盞鳴尊（すさのおのみこと）に代われられたという伝承に基づき、新たな社格に組み入れられたのです。牛若丸もジンギスカンになっていますので、十分ありうるのです。00天王社という旧来の名前も00社と変えました。

高さ22m（10mの松も含む）の大山が2台と、高さ12m（祠の高さは8.6m）の山車が6台の計8台が、熱田神宮の門前町と港町とで出されていたのですが、明治になって電線に邪魔となり、津島神社をまねて海を渡る巻き藁船と変えたのですが、昭和48年に巻き藁船もやめてしまいました。熱田の港は信長の父信秀が古渡城を設けて以来、織田が押さえていたの

でしょう。年魚千潟を挟んだ東側は、織田の重臣・佐久間の領地でした。

信長の記録の影はどこにもありませんが、熱田の天王祭も当然津島から来たものであると思われるので、若い信長も喜々として参加したかもしれません。

この大山の構造こそ、岡部又右エ門が安土城天守の吹き抜けを中心に 7 層を組み上げるに、ヒントになったと。の論文もあります。穴倉の上に 3 層の入母屋を載せるのに、先にこの大山を組んだというのです。

信長公記では「吹き抜け」の存在を書いていませんが、京都で信長の二条の館を東宮の為に改築を命じられていた京都所司代・村井貞勝の記録を太田牛一は写し取っただけですので、村井の関心「御所の造営」には、吹き抜けは、まさに void (ボイド) であり、何もないので、平屋の御所の為には、記録も取りようもなかったのだと思います。

## 第二章 牛頭天王

### 第二章 第一節 祇園祭

都の災いは、非業の死を遂げた怨霊のせいだと、桓武天皇の弟の早良親王をまつる御霊神社、平安時代に比叡山延暦寺を立て直した元三大師をまつる廬山寺、菅原道真をまつる菅原院天満宮、明治天皇が崇徳天皇の呪いを鎮めようと 1868 年に創設した白峰神宮、陰陽師安倍晴明を祀った清明神社、昼間は天皇に仕え、夜は閻魔大王に仕えた小野篁をまつる六道珍皇寺と、悪霊を沈めるいわゆる官立の神社仏閣はあるのですが、八坂神社で行われる疫病封じは、町人が自らの力で強力な牛頭天王にわが町に来ていたき、悪霊をやっつけていただいたら、さっさと退散ねがうところが、御霊会とは違ってきていると思うのです。

ウイキペディアから一応写しておきます。

貞観 18 年 (876 年) には、播磨国広峯から、仏教の聖地である祇園精舎の守護神である牛頭天王が京都に遷座し、現在の八坂神社の地に落ち着いた。そこに祇園社として祭られ、感神院と号して比叡山延暦時に属した。

中世を通じて、祇園社は延暦寺の末寺とされ、山門 (延暦寺) の洛中支配の拠点となった。祭りは祇園社の神輿渡御を中心とするが、これに現在見られるような山鉾がともなうようになった時期は明確には分らない。(足利義満が明と貿易を行い、その商いに参加した町人が力をつけたころからでしょうから、15 世紀からだ「町衆」林屋辰三郎著中公新書昭和 39 年刊を読んで私は思います。)



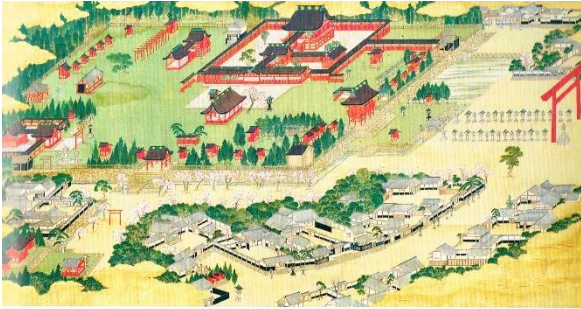
なんで、御輿でなく、曳山、だんじり、山笠と車をつけて引きまわすのか。概して都市化が先に進んだ九州には、祇園まつりが伝わり、福岡、佐賀、長崎、大分とあり、博多の櫛田神社の博多祇園山笠は特に有名です。江戸時代には、川越、秩父、奥州市日高まで北に広がってあります。従妹がすむ本巢市には馬追いまつりが 7 月にあるのですが、そこにも山車があるのです。ですので、派手な曳山、山笠で飾り、お囃子方を載せるために山車が生まれたのだと、しておきましょう。

「蘇民将来」のお話もウイキペディアから入れておきます。

・古くは鎌倉時代中期の卜部兼方『釈日本紀』に引用された『備後国風土記』の疫隈国社の縁起にみえるほか、祭祀起源譚としておおむね似た形で広く伝わっている。

・旅の途中で宿を乞うた武塔神（むたふ（むとう）のかみ、むとうしん）を裕福な弟の巨旦将来は断り、貧しい兄の蘇民将来は粗末ながらもてなした。後に再訪した武塔神は、蘇民の娘に茅の輪を付けさせ、蘇民の娘を除いて、（一般的・通俗的な説では弟の将来の一族を、）皆殺しにして滅ぼした。武塔神はみずから速須佐雄能神（スサノオ）と正体を名乗り、以後、茅の輪を付けていれば疫病を避けることができると教えたとする。

・茅の輪潜りとともに、「蘇民将来」と記した護符は、日本各地の国津神系の神（おもにスサノオ）を祀る神社で授与されており、災厄を払い、疫病を除いて、福を招く神として信仰される民間信仰である。



## 第二章 第二節 津島天王祭り

津島神社の縁起「津島牛頭天王祭文」では、「欽明天皇元年（540）に、対馬より・・・」とありますが、延喜式神明帳（927年）にはありません。文献上の初出は1175年に、伊勢、熊野、多度などと15カ所の権現大明神の中に入っています。牛頭天王は、残る鉄灯籠に「天王御宝前奉灯籠 延口二年6月15日」とあり、延応とすれば1239

年、延慶ならば1308年と、いずれも鎌倉時代になります。

室町時代も応仁の乱以降には、津島御師による東日本への天王信仰が広められたのでしょうか。御師の活躍は伊勢神宮が有名ですが、疫病は都市民の最も恐れるものであり、江戸時代の津島御師によるお札と祈祷の記録は多数残っています。農村では、人だけでなく稲の疫病「虫よけ」も含まれていました。楼門は秀吉の寄進と伝えられ、本殿は尾張藩主松平忠吉の病氣平癒祈願のために、彼の妻女が寄進したと棟札にあります。



### 宵祭り（試楽）・朝祭り

7月の第4土・日曜日に開催される津島天王祭りは、多くの観光客を集めています。昔は試楽と言われた宵祭りの午前中に、まずは御輿が池の畔作られた御旅所に渡ります。夕方になると5隻の巻き藁船が、1年の日数を表す360個の提灯を半球状に並べ、真柱には月の数の12個（閏月があるときは13個）の提灯を飾ります。

5隻の船（車と呼ぶ）は、津島の下構（古くは中嶋）、今市場、筏場、堤下、米座の5カ村から毎年順番を変えて出されます。村の名前からして、村の生業がわかって楽しいです。地名とは本来はこうだったのでしょ。

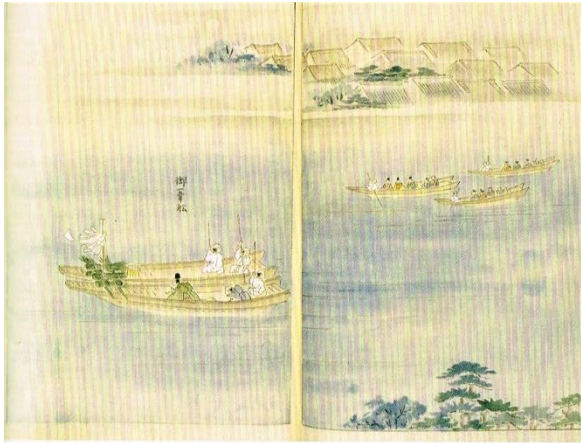
翌日の朝祭りには、津島の5車に加えて、下流の元の市江島（現在は弥富町と佐屋町の一部）からでる市江車を先頭に、能人形を乗せた6隻の車楽船が車河戸から御旅所に向かいます。途中、市江車から10人の若者が鉾をもち、





池に飛び込み御旅所を経て、神社に向かいます。3番目の若者が神社の楼門前の橋に架けられた注連縄を切ります。祇園のなぎなた鉾の出発の合図と似ていますね。

つづいて、6隻の車屋（代表者、庄屋）・稚児・囃子方など、御旅所前に上陸し、「献上物」が献上されると、御輿は神社にもどります。稚児が神社拜殿で盃事を行い、神前での奏楽があります。

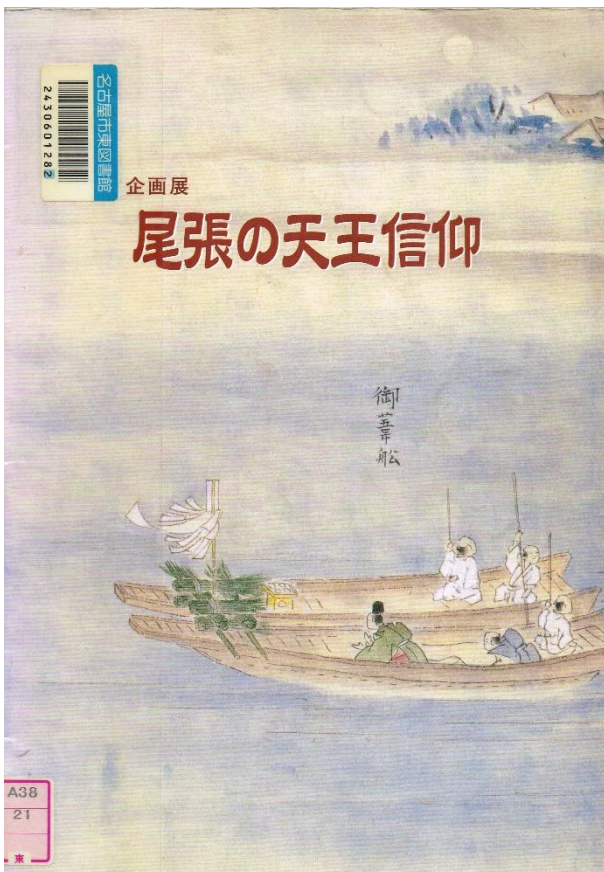


12-1 張州雑志 巻73 御葎舟

### 御葎神事

朝祭りの深夜に、一年間神殿に保管されていた古き真の御葎を、葎を束ねた人形・葉付きにさして、密かに川に放流します。今は池ですが、天王橋を塞ぎ止めたのは天明5年（1785年）までは、ケガレを流すというか、お盆の精霊流しのような神事が行われていました。古き真の御葎が流れ着いた下流の村は大変で、灯明台を設置して、さらに75日間、夏の間中祀らないといけませんでした。これを祭りとするなら楽しいことと、御葎を奪い合ったという記録が「金明録」にあります。

牛頭天王も去り方が難しいようです。厄病神に長くいてももらっても困ますので、天王迎え→天王祭り→天王送りが基本なのでしょう。天王信仰も東日本に広がるにつれて、あちらこちらの社（ex. 東京都荒川区南千住の素盞雄神社天王祭）に常駐するようになるのですが、東区の山車祭りでは前日に津島神社からお札をもらい受けているので、津島天王神社の御利益が、やはり、ありがたいのでしょうか。御師の力がなせた今に至る習いですが、クスリのおかげで牛頭天王の力も発揮できなく、天王祭りの由来をしらないままに、東区でも担ぎ手不足に陥っています。



### 第3章 名古屋の牛頭天王信仰

今まで書いてきた事の多くは、この本によります。平成11年に名古屋市博物館で企画展「尾張の天王信仰」が行われたのですが、そのまとめの本です。巻末には、尾張では、80の天王祭りがあると記されている労作です。

山車だけに注目すると、尾張ならではのカラクリに乗せた山車はもちろん、それ以外も含めて、愛知県には422もあります。大村知事が会長を勤める「あいちの山車まつり日本一協議会」<https://www.dashi-aichi.jp/council/> まで作ってしまいました。山車と天王祭り」でなく、「山車と祭り」が正しい結びつきなのでしょう。

それぞれの由来と内容はこの本に任せて、名古屋の牛頭信仰だけを追います。

東区筒井町は、江戸時代から建中寺の門前町ですが、出来町となると、名古屋の城下から出てしまいます。今の赤塚から東は城外でしたし、山車を出す財力も江戸時代にはなかったもので、山車は江戸末に都心の町からもらい受け、明治・大正と東区が工業の町、瀬戸物の絵付けの町として、町が発展してからの事だろうと思われます。



大正9年の名古屋の地図です。出来町、筒井町がようやく、名古屋の端に入っています。

江戸時代の名古屋の祭りと言えば、4月の東照宮祭りと6月の亀尾天王社祭りが、家康によって町人地の南端に置かれた若宮大通りの若宮神社との3社の間での町人地を引き回す山車がメインでした。東照宮祭りでも山車を引きまわっていたのです。

江戸時代には、片端に2台を置いての祭りから、車町、増山町、広井村、名古屋村と城下を広げて最大16台のカラクリ山車があったそうです。

明治になると、祭りの担い手の町人の力が落ち、都心は路面電車が走り、電線が駆け巡られ、背の高い山車が町中を練る事ができないという物理的な事もあったので、牛頭天王信仰そのものが政府によって、否定されたのが大きいと思われます。

亀尾天王社は那古野神社となり、熱田の南新宮天王社（1002年鎮座とされている）は例祭に含まれ、中区の天王崎天王社は洲崎神社となり、西区の八坂神社、南区の富部神社と、天皇に音が同じ天王が消され、150年前の明治の宗教改革が、この地に500年前から伝えてきた夏の牛頭天王祭りを消してしまいました。



枇杷島、呼続など、東区と同様に名古屋の周辺に、牛頭天王祭りが移っていったのでしょうか。町が発展し、山車を持つことが町の誇りとなると思う人々が、ちょうどその時代にタイミングよく東区おり、牛頭天王の山車まつりが残ったのだと思います。

尾張の殿様が城を天皇の離宮として渡したので、家老の下屋敷であった徳川町の荒れ地に、明治33年、名古屋の屋敷を構えたのも、筒井町、出来町に大きな力

になったのでしょうか。

東区の山車祭りの5台以外に、からくり人形が乗る天王祭は、西枇杷島祭、牛立天王祭（中川区）、大森天王祭（守山区）、岩倉祇園祭（岩倉市）とありますが、東区の5台は、6月の第一日曜日に徳川園に勢ぞろいする（平成18年より）ことによって、名古屋一番の祭りとなりました。平成25年には、「特定非営利活動法人東区山車まつり振興会」[http://higashiku-dashi.or.jp/?page\\_id=2](http://higashiku-dashi.or.jp/?page_id=2) も作られ、東区の応援も得ていますので、これからを期待です。

東区の山車まつりの現在の詳細は、上記のホームページにありますので、ここには書きません。ご覧ください。山車がどこで作られて、今に至るかは伝承として捉えた方が良いでしょう。

私は、道一本違い「出来町・西の切り」には入れない近隣の住人ですが、東区の山車まつりを以下のようにまとめてみました。

#### まとめ

牛頭天王信仰とは、牛を使う朝鮮からの渡来人による信仰由来の説など、民俗学的にはいろいろあるのですが、プラクティカルに捉えると、室町時代からの町衆の力が、町衆が恐れた町の疫病封じに、御霊会という日本独自の信仰を元に牛頭天王信仰を生み出し、町衆による山車巡航の祇園祭りが、まず京で起こり、博多、津島のように財を持つところ、都市には戦国時代に伝来し、徳川幕府によって全国一斉に、150もの都市ができたとき、江戸も名古屋も都市のフィジカルプランだけでなく、都の文化として天王祭りを京より移入したのです。天王祭りは、明治政府の「天王つぶし」にも負けず、都市周辺部で祭りは残り、それが東区の山車まつりなのでした。